

特集

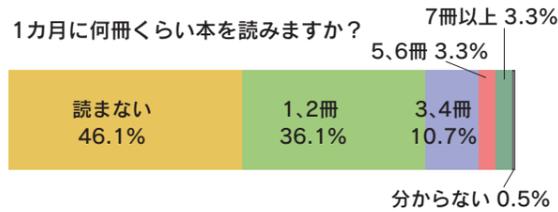
子どもと本を結びつけるスペシャリスト ガッコーシシヨってどんな人？

子どもが読書好きになるために、さまざまな働きかけを行う「学校司書」。本市では、子どもの読書環境を充実させるため、昨年度まで4人だった学校司書を本年度から14人に増員しました。今回は学校司書の役割や子どもたちとの関わりなどについてお知らせします。



読書離れを背景に 国、県が新たな取り組みを開始

皆さんは1カ月に何冊くらい本を読みますか？



「平成20年度国語に関する世論調査」(16歳以上を対象に文化庁が実施、表1)では、1カ月に1冊以上の本を読む人は53・4%。1カ月にまったく本を読まない人は46・1%で、14年度と比較し8・5ポイントも増え、大人の「読書離れ」が顕著になっていることが分かりました。

表2 学校司書配置前後の図書貸し出し数調べ(佐世保市)

区分	配置前	配置後	増加率
小学校	18.2冊	33.5冊	184%
中学校	2.3冊	9.0冊	391%

※児童生徒の1人当たり年間平均図書貸し出し数

に付けていく上で欠かすことができないものです。しかし近年、少子化や核家族化が進むとともに、テレビゲームやインターネット、携帯電話などさまざまな情報メディアが普及し、子どもを取り巻く生活環境が大きく変わり、子どもたちの読書離れが懸念されるようになってきました。

全国の子どもの読書量を調査した「平成13年度学校読書調査」(毎日新聞社)では、1カ月にまったく本を読まない人は、小学生で10・5%、中学生で43・7%、高校生で67・0%という結果でした。こうした状況を受け、国は平成13年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」を制定。16年度には、県により「長崎県子ども読書活動推進計画」がまとめられ、「朝の10分間読書」や「全校一斉読書活動」などの取り組みが県内の公立学校で実施されるようになりました。

本市では

学校司書を大幅に増員

佐世保の子どもたちが読書を通して幅広い知識を身に付け、人間性あふれる大人に成長することは、わたしたち市民の願いです。こ

したことから本市では、子どもの読書活動に関する方針や施策をまとめ、本年3月に「読書大好き佐世保っ子プラン21」を策定しました。

この計画の基本方針の一つに「司書や図書ボランティアなど、子どもと本を結びつける人材の育成、充実」を掲げており、これまで4人だった「学校司書」を本年度から14人に増員するなど、さまざまな事業に取り組みことにしています。

本と子どもたちの

出会いをつくります

学校司書とは、学校の図書室を担当する事務職員のことです。司書の資格を持ち、図書室の本の管理や本の貸し出し、返却はもちろん、新しく本を購入したり、ポロポロになった本を直したりと図書室のすべての運営を担当します。

子どもたちに本の面白さを伝えることも学校司書の大切な役割です。日ごろから子どもたちとコミュニケーションを図り、子どもたちの関心事を把握したり、展示コーナーを作ってお薦めの本を紹介したりと、さまざまな方法で、本と子どもたちとの出会いをつくります。

また授業に関連した本を子どもたち

に紹介し、先生と連携して学習内容に興味を持たせる手助けなども行います。このようにして、本で子どもたちの成長を手助けするのが学校司書の仕事です。全国の約45%の市区町村に配置されています(2009年度全国学校図書館協議会調査)。

学校司書の配置で

貸し出し数が大幅に増加

本市では、平成17年度に初めて3人の学校司書を採用しました。18年度以降21年度までは1人増員し、各年度4人の学校司書を配置しています。当初は1人が1校を受け持つ体制でしたが、現在は1人当たり2校を受け持っています。本年度から学校司書が14人(小学校8人、中学校6人)になると、5年間で、市内すべての小・中学校に2年間ずつ学校司書を配置できることとなります。

学校司書を配置した小・中学校では、学校司書の皆さんの努力の積み重ねにより、図書室へ出入りする子どもが増え、図書の貸し出し数も大幅に増加しています(表2参照)。

学校司書の増員により、子どもたちの読書離れに歯止めがかかり、多くの子どもたちが読書好きになることを期待しています。